

## 心の栄養剤No105 「癌と言われて」

こんな落語がある。

「・・・抗がん剤の副作用に髪の毛が抜ける、というのがあります。あれ、イヤなもんですよ、アタシも抜けました。ショックです。けどね、病院はそんなことは心配していないんです。なぜかという、また生えてきますからね。あっ、言っときますがね、また生えてくるのは、治療の前に毛があった人だけですよ」

会場は笑いの渦に包まれる。ただし、その会場にいるのはガン闘病のつらさを体験した人。そして、このネタを演る樋口強さん自身も、そのつらさを経験した人だ。樋口さんは、1年に1回だけ、がん患者とその家族だけを招待して「いのちに感謝の独演会」を開いている。

元々はバリバリの企業戦士だった。新規事業を立ち上げる最前線にいた1996年、43歳の時、悪性度が高い肺ガンを告知された。

「3年後の生存率は5%です。5年後の生存率の数字はありません」

抗ガン剤の後遺症で全身に麻痺が残った。箸も茶碗も持てない。服が着られない。字が書けない。歩けない。普通のことが出来なくなった。そんな夫を見て、奥さんは食器洗いと洗濯物をたたむという家事分担を与えた。茶碗やコップを落としては割る日々が続いた。割れた破片で指を切っても奥さんは手を出さなかった。キッチンの床はいつも水浸し。奥さんは黙って床を拭いた。

そんな日々が当たり前のように過ぎていき、半年が経った頃、樋口さんの体は食器洗いと洗濯物をたたむことを完全に覚えてしまった。家事労働がリハビリに役立ったのだ。これ、奥さんからすると逆だった。リハビリが家事に役立った。だから夫に言う

「いつもありがとう」

15年の歳月が流れた。自分でお茶が飲める、歩ける、字が書ける。人よりも何倍も時間はかかるけど。

エッセイストの岸本葉子さんは40歳の時、突然進行性のガンに襲われた。やれる治療は何でもやった。後は再発をどうやって防止するか、だ。だが、主治医の言葉は冷たかった。

「現代の医学には再発を防ぐための確立された方法はありません」

そう言われて、人間は「はい、そうですか」と何もしていないでいる生き物ではない。岸本さん、食生活の改善、気功、漢方、何でもやった。

知り合いから・・・

「そんなふうに頑張るストレスが、むしろガンに良くないんじゃないの？」

と言われた。

確かにこれをやったら大丈夫という科学的根拠はない。

「こんな事やってもしょうがないのかな」

心が揺らいた。そんな時、読んでいた頼藤和寛著『人みな骨になるならば』という本の中にこんな言葉を見つけた。

「無駄と知りつつ何かに熱心に取り組むことが出来るかどうか  
人生の質を決める」

岸本さんは思った。

「こうすればこういう結果が得られる、そんな保障なんてなくてもいい。  
自分の気が済むよう、やれるだけのことはやりました。精一杯生きました  
という人生にしよう」

と。そして何事もなく10年の歳月が流れた。

みやざき中央新聞社説より

一生のうちに「あなたは癌です」と告知される場面に遭遇する割合が50%を越え、30%の人が癌で命を落とすという時代です。そして、この数は年々増えているのも現実です。

そんな状況にならずに済むように、日々養生に心掛けて生活する事はもちろん大切ですが、もしも自分が、そして愛する人がそんな状況になった時、おそらく恐怖を覚え動揺するのは仕方ない事ですが、一方で冷静に対応出来る心構え、勉強をしておく事も必要だと思います。

私は健康の心構えで一番大切な事は、どんなに大変な病気だとしても、病院でどんな治療をやっているとしても・・・

## 「自分の身体は、自分で守り、自分で治す」

という気持ちを持っておく事だと、これが30年以上この仕事をやらせて頂いて辿り着いた私なりの一つの結論です。

※私としては今、不安～心配を抱えて苦しんでおられる方の、少しでもお役に立てるような存在である店(自分)であるよう日々頑張ります!!

